

簀

古名

簀梅

世阿弥作

前

ワキ
西国の僧

シテ
里人

後

ワキ
前に同じ

シテ
梶原景季

地は
摂津

季は
二月

ワキ次第

「春を心のしるべにて。く。憂からぬ旅に出でうよ。」

詞

「是は西国方より出でたる僧にて候。我いまだ都を見ず候ふ程に。此度都に上り洛陽一見と心ざし候。

道行

「旅心。筑紫の海の船出して。く。八重の潮路を遙々と。分けこし方の雲の波。煙も見えし松原の。里の名問へば須磨の浦。生田の河に着きにけり。く。」

シテ次第

「来る年の矢の生田川。流れて早き月日かな。

サシ

「飛花落葉の無常は又。常住不滅の栄をなし。一色一香の艶情は。無非中道の眼に応ず。人間個々艶情の觀念。なほ以て至り難し。あら定めなの身命やな。」

下歌

「人間有為の轉變は。眼子の内に顕はれて。

上歌

「閻浮に帰る妄執の。く。其生死の海なれや。生田の川の幾世まで。夢の巷に迷ふらん。よしとて

も身の行くへ。定めありとても終には。夢の直路
に帰らん。く。

ワキ詞 「如何に申すべき事の候。是なる梅は名木にて候ふ
か。

シテ 「さん候是は簾の梅と申し候。

ワキ 「あらおもしろや簾の梅とは。いつの代よりの名木
にて候ふぞ。

シテ 「いや名木程の事は候はねども。唯私に申しならば

したる異名にて候。

ワキ 「よし／＼私に名づけたる異名なりとも。委しく御

物語り候へ。

シテ 「そも／＼此生田の森は。平家十万余騎の追手なり

しに。源氏の方に梶原平三景時。同じき源太景季。

色ことなる梅花の有りしを。一枝折つて簾にさす。

此花すなはち笠印となりて。気色あらはに著く。

功名人に勝れしかば。景季かへつて此花を礼し。

すなはち八幡の神木と敬せしより以来。 名将の古跡の花なればとて。 簾の梅とは申すなり。

ワキ 「実にや名将の古跡と云ひ名木と云ひ。 名残尽きせぬ年々に。

シテ詞 「降るは程なき春雨の。 古きに帰る名を聞けば。

ワキ 「其景季の盛りなりし。

シテ 「若木の花の白真弓。

ワキ 「簾の梅の。

シテ 「今までも。

地 「名を留めし。 主は花の景季の。 く。 末の世かけて生田川の。 身を捨てゝこそ。 名は久しけれ武士の。 やたけ心の花に引く。 弓筆の名こそ妙なれや。 弓筆の名こそ妙なれ。

地クリ 「さる程に平家は去年播磨の室山。 備中の水島二箇度の合戦に打ち勝つて。 山陽道南海道。 合はせて十四箇国の兵。 都合十万余騎。 津の国一の谷にぞ

籠りける。

シテサシ

「東は生田の森。西は一の谷を限つて。其間三里が程は満ちくたり。

地

「浦々には数千艘の船を浮べ。陸には赤旗いくらも立てならべ。春風に靡き天に翻る有様。猛火雲を焼くかと思えたり。

シテ

「総じて此城の前は海後は山。

地

「左は須磨右は明石の。とよりかくより行きかふ舟

の。共音の千鳥も声々なり。

クセ

「時しも如月。上旬の空の事なれば。須磨の若木の桜も。まだ咲かぬる薄雪の。さえかへる波こゝもとに。生田のおのづから盛りを得て。かつ色見する梅が枝。一花開けては天下の春よと。軍の門出を祝ふ。心の花もさきかけぬ。さる程に味方の勢。六万余騎を二手に分けて。範頼義経の追手搦手の。海山かけて須磨の浦。四方を囲みて押し寄

する。

シテ「魚鱗鶴翼もかくばかり。

地

「後の山松にむれるるは。残りの雪の白妙に。ねぐらを立たん真鶴の。翅を連ぬる其気色。雲にたぐへて夥し。浦には海人様々の。漁父の船影数見え。漁たく火もかげろふや。嵐も波も須磨の浦。野にも山にも漕ぎ寄する。兵船はさながら。天の鳥船もかくやらん。

ロンギ地

「はや夕ばえの梅の花。月になり行く仮枕。一夜の宿を借し給へ。

シテ

「我は宿りも白雪の。花の主と思し召さば。下臥に待ち給へ。

地

「花の主と思へとは。御身如何なる人やらん。シテ「今は何をか包むべき。我は此世に亡き影の。

地

「跡弔はれんと夕草の。

シテ

「其景季が幽霊なり。

地

「御身他生の縁ありて。一樹の陰の花の縁に。鶯宿
梅の木の本に。宿らせ給へ我は又。世を鶯のねぐ
らは。此花よとて失せにけり。此花よとてぞ失せ
にける。（中入）

ワキ歌

「うば玉の。夜の衣を返しつゝ。く。更け行くまゝ
に生田川。水音も澄む夜もすがら。花の木陰に臥
しにけり。く。

後ジテ

「魂は陽に帰り魄は陰に残る。執心却来の修羅の妄

執。去つて生田の名にしおへり。

地

「血は涿鹿の河となり。

シテ

「紅波楯を流しつゝ。

地

「白刃骨を砕く苦しみ。月をも日をも手に取る影か
や。長夜のやみくくと眼もくらみ。心も乱るゝ修
羅道の苦しみ。御覧ぜよ。

ワキ

「不思議やな其さまいまだ若武者の。胡籙に梅花の
枝をさし。さも花やかに見え給ふは。如何なる人

にてましますぞ。

シテ「今は何をか包むべき。是は源太景季。他生の縁の一樹の陰に。夢中の対面向顔をなす。御身貴き人なれば。法味を得んと魄霊の。魂に移りて来りたり。跡弔ひ給へといはんとすれば。又嗔恚の敵の攻め。あれ御覧ぜよ御聖。

ワキ「実にく見れば恐ろしや。剣は雨と降りかゝつて。シテ「天地をかへす如くにて。

ワキ「山も震動。

シテ「海も鳴り。

ワキ「雷火も乱れ。

シテ「悪風の。

地「紅焰の旗を靡かし。紅焰の旗を靡かして。閻浮に帰る生田川の。波を立て水を返し。山里海川も。皆修羅道の巷となりぬ。こは如何にあさましや。

シテ「暫く心を静めて見れば。

地「心を静めて見れば。所は生田なりけり。時も昔の春の。梅の花盛りなり。一枝手折りて簾にさせば。もとよりみやびたる若武者に。相逢ふ若木の花鬢。懸くれば簾の花も源太も。我さきかけんさきかけんと。心の花も梅も。散りかゝつて面白や。敵の兵之を見て。あつぱれ敵よ逃がすなとて。八騎が中に取り籠めらるれば。

シテ「兜も打ち落されて。

地「大童の姿となつて。

シテ「郎等三騎に後を合はせ。

地「向ふ者をば。

シテ「拝み打ち。

地「又廻り逢へば。

シテ「車切。

地「蜘蛛手かく縄十文字。鶴翼飛行の秘術を尽すと。見えつる内に夢覚めて。しら／＼と夜も明くれば。

是までなりや旅人よ。暇申して花は根に。鳥は古
巢に帰る夢の。鳥は古巢に帰るなり。よくく弔
ひて給ひ給へ。

底本…国立国会図書館デジタルコレクション『謡曲評釈 第六輯』大和田建樹 著